

〈自己責任〉とは何か

桜井 哲夫著



本書は、公義憤から生まれた「抗議のパンフレット」だ。著者は言う(おどがき)。自己責任をどうしてない日本人への抗議ではない。自己責任の名のもとに、責任のない者に責任を押しつけようとする企みの抗議である。責任のない者に対して共同責任も連帯責任をせよとするのだ。

これを例証するために、古今東西の学説がびっぴりと引用される。ウォルフェンの有名な日本異質論を念せせ学問的テキストとして批判し、かわりに日本文化の雑居性を評価する。丸山真男

「無責任」の体系「論を批判し、ナチスの幹部たちにも「無責任」の体質は存在した」とする。話がつきつき飛びすきて、何が言いたいのかわからぬ。著者の見解に反するようだが、自己責任の考え方はこの点で有効だと思ふ。責任逃れや押しつけが生じるのは誰かからか。人々が自己責任を掲げて官僚の口出しをはねのけるというふう、政府・官僚の行動を厳しく監視する。このよう方もある。責任追及のための前向きな提案が本書に少なかつたのは残念である。講談社現代新書・六四〇円。(東京工業大学教授 橋爪 大三郎)

弱者への責任押しつけに抗議

本書は公義憤から生まれたのである。著者が反対するのは、規制緩和の名のもとに進められるアメリカの介入であり、自己責任の名のもとに進められる弱者切り捨て政策や家庭の崩壊である。責任のない者に責任を押しつけるインシジョン・ワードこそ、自己責任の責任の名のもとに進められる「無責任」の体系「論を批判し、ナチスの幹部たちにも「無責任」の体質は存在した」とする。話がつきつき飛びすきて、何が言いたいのかわからぬ。著者の見解に反するようだが、自己責任の考え方はこの点で有効だと思ふ。責任逃れや押しつけが生じるのは誰かからか。人々が自己責任を掲げて官僚の口出しをはねのけるというふう、政府・官僚の行動を厳しく監視する。このよう方もある。責任追及のための前向きな提案が本書に少なかつたのは残念である。講談社現代新書・六四〇円。(東京工業大学教授 橋爪 大三郎)

吉本 隆明著
アフリカの段階について
史観の拡張

「アフリカの段階」の初源にも見出されるものだという。アフリカの「シブア」へアメリカン・インディアンのアンチテーゼである「リトル・トリー」という自伝小説。日記(古事記、日本書紀)の神話世界。アフリカ各地の部族の伝承。英国の女性旅行家による、アイヌの民族観察記『日本奥地紀行』。セイロン島の王権について紹介する『セイロン島誌』。時代も場所もさまざま異なる民族の重層的な織り合わせを読み進んでいくうちに、吉本氏が「アフリカの段階」をどうイメージしているかが浮かびあがってくる。



ヘーゲル



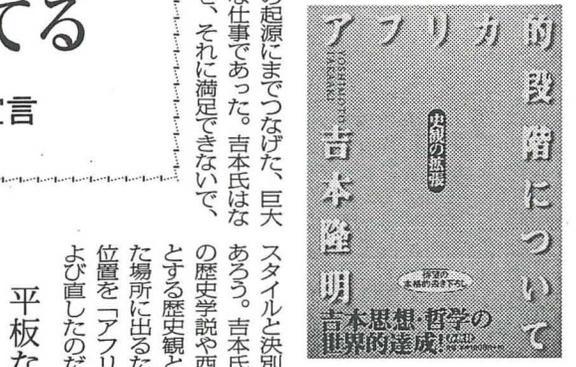
吉本 隆明氏

本書の通奏低音をなすが、ヘーゲルである。ヘーゲルは「アフリカの段階」をどうイメージしているかが浮かびあがってくる。集合的な想像力のかたちを焦点をあてている点で、本書は『共同幻想論』とよく似ている。『共同幻想論』は、柳田国男の『遠野物語』を素材に、原初的な共同社会の集合的心性(共同幻想)のあり方を記紀の神話世界や古代王権

集合的な想像力の初源のかたちを焦点あてる

疎外論からの離脱と普遍性の宣言

橋爪 大三郎



46判・173頁・1600円
春秋社
4-393-33169-9

「アフリカの段階」は、初源ではあるが、それ以後のどの段階でも反復して見出されるものである。△アフリカのこのことを段階として設定することは人類の原型的な内容を掘り下げることが系統課題だとする点と同義である(一四四頁)。そして、はや、疎外論に特有ななげは、自己幻想や対幻想のあり方と相剋的であり、いずれは解消されることを運命づけられていた。これは

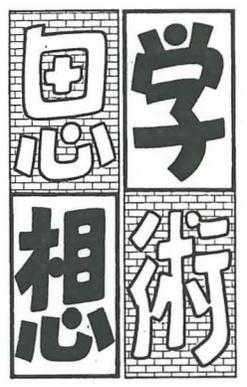
マルクス主義にいう、国家権力の廃絶テーゼを言い換えたものである。いっばう逆立を抜き去った疎外論は、ある原初的なものが直線的な発展の過程をたどるといふ、素朴な発生論と似かよ

史観の拡張

そのうえで考えてみることもできる。本書は、新たな仮説の提示に主眼があるというよりも、これまでの仕事を総括するひとつのミニフェスト(宣言)である。まず第一に、吉本氏自身が、ヘーゲル、マルクス以来の疎外論の文脈を最終的に離脱したことの宣言。言い換えれば、マルクスの深い受容から出発した吉本氏の思想が、構造主義以後の

これまでの仕事を総括するひとつのミニフェスト

マルクス主義にいう、国家権力の廃絶テーゼを言い換えたものである。いっばう逆立を抜き去った疎外論は、ある原初的なものが直線的な発展の過程をたどるといふ、素朴な発生論と似かよ



★よしもと・たかあき氏は詩人・評論家。東工大卒。著書に「言語にあって美とはなにか」「共同幻想論」心的現象論序説「悲劇的解読」最後の親鸞「マス・イメージ論」「ハイ・イメージ論」「母型論」など。一九二四(大正13)年生。

教育改革の 知恵をしぼる

去年から今年にかけて、教育改革のプランづくりに首をつっこむことになった。

昔の日本生産性本部が、社会経済生産性本部と看板を掛けかえ、社会問題にも幅広く提言を行なうのだという。教育問題に取り組む委員会に加わらないかと誘われ、実際の作業を担当することになった。同じ専門委員の内田隆三氏、大澤真幸氏と手分けをして、首都圏や地方都市の小中学校の先生をインタビューに回る。進学教室や大検予備校の責任者から話を聞く。委員会でも討議を重ね、「選択・責任・連帯の教育改革」という中間報告書にまとめて発表した。

小中学校の学区制廃止、校長の権限強化、高校入試・大学入試の廃止、高検の導入、キックアウト制の導入、奨学金の充実など、思い切った提案を並べた。宣伝のため、毎日、朝日などの主要各紙にも文章を書いた。激励の電話やファックスがどっと届いた。報告書はたちまち品切れ、2度も増刷した。こんなに反響があったのは初めてだ。

だんだんわかってきたのは、まず、教育行政の責任者はちっとも実態がわかっていないということ。現場でさえ、中学の教師は高校以上のことを知らないなど、教育の全体が見えていない。私の場合、大学生になってから20年間、「お受験」から小・中・高・大学・大学院まで、まんべんなくいろいろな生徒を教えてきた経験が役に立った。にわか教育専門家の誕生である。



題は、責任の所在を明確に感受する、社会習慣の確立なのではないかと思った。

大澤真幸『戦後の思想空間』は、講演録にもとづく小著ながら、鋭い切れ味を見せている。戦前と戦後が六十年を隔てて同型の軌跡を歩んでいるとする説。誰かのちよつとしたアイデアや単なる思いつきとも見える符合が重なっていくうちに、著者の描く図柄はいつのまにか、われわれのよく知る戦後を、たしかな手応えとして再構成している。本書の収穫は戦前を、戦後と本質的に違いない対等な空間として、当たり前のようには眺める視点を読者に提供した点であろう。

韓国や中国などアジア諸国との歴史認識の違いが、外交問題として浮上している。そもそも戦後の日本人は、語りうるほど歴史について考え詰めたか。「侵略戦争」という思考停止のマジックワードを掲げずに、どこまで考えて行けるか、とことんやってみるしかない。

(社会学)

橋爪大三郎

日本の社会と 国家を迷走させて いるもの

単行本ベスト3

『敗戦後論』

加藤典洋/講談社

『戦争と罪責』

野田正彰/岩波書店

『戦後の思想空間』

大澤真幸/ちくま新書

文庫本ベスト3

『講和條約 戦後日米関係の起点』

1~12

児島襄/中公文庫

『エイズ犯罪 血友病患者の悲劇』

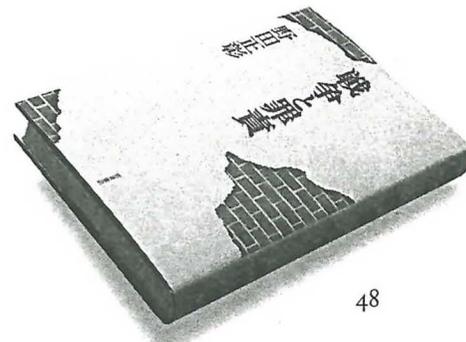
櫻井よしこ/中公文庫

『ゴーマニズム宣言
差別論スペシャル』

小林よしのり/幻冬舎文庫

加藤典洋『敗戦後論』が、大きな反響を引き起こし、その余波はまだ続いている。私は本書の提起を、重く受け止める。「冷戦」が終わったのに、「戦後」がまだ終わっていない。その不整合が、日本の社会と国家を迷走させている。日本のネーションが戦前との連続性のうえに、みずからの正統性を確立すること。「歴史主体の形成」、「アジアの二千万の死者よりも先に日本の三百万の死者を」というフレーズが意味することはこれであろう。

野田正彰『戦争と罪責』は、軍医や憲兵、一般将兵として戦争に参加した人びとの、罪の意識を問う。命令した者は、実行していないからまだよいと思ひ、実行した者は、決定したわけではないからまだよいと思う。奇妙な無責任の輪のなかで、生体解剖や拷問が繰り返り広げられていった。野田氏は旧軍人たちに「心の痛み」が欠けていることに驚き、彼らの内面に分け入っていく。しかし問





「座右の銘」は生き方の一つの指針です。
人生の達人たちの色々な生き方をぜひ汲み取って下さい。

語りえぬことは沈黙せねばならぬ

ワイトゲンシュタイン『論理哲学論考』末尾の一文。

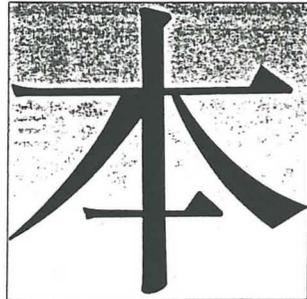
東京工業大学教授 ●橋爪大三郎

●要するに、めんどろなのだ
橋爪大三郎 社会学

コンピュータを嫌いと言えるほど、コンピュータを使っていない。いや、嫌いだから使っていないのか。とにかく、好きとは言いがたい。
まず、値段が高い。
つぎに、場所をとる。
第三に、配線がけっこうややこしい。
第四に、スイッチを入れないと、じっとしているだけで何もしない。
第五に、故障しても、中をのぞいて直したりできない。機械のくせに、自分のメカニズムを見せないとは生意気だ。
第六に、すぐ新機種が出る。
第七に、ごくごく簡単なことでも、やってみるまでは、手も足も出ないような感じがする。
第八に、嫌な点をこれ以上数えあげるのが面倒なくらい、たくさんある。だから、おしまい。



緑陰読書特集



夏休みのための200冊



各界のトップ、専門家に「最近読んだ良い本」(①~④)、「これから読みたい本」(⑤~⑩)を挙げていただきました。ベストセラーに出ない優れた本も。(掲載は回答到着順)

トップ・専門家が推す"この本"

橋爪大三郎

東京工業大学教授

①副島隆彦「日本の危機の本質」(講談社)

日本人の無意識を支配し日本の命運を握っているアメリカについて、私たちは無知で無邪気だ。リアリストの視点に立って、戦後の知識世界の虚構をあげていく。

②小林よしのり「新ゴーマニズム宣言スペシャル・戦争論」(幻冬舎)

戦後の日本を戦前との連続でとらえるという試みを果敢に行った。日本がこの先に進むのに避けて通れない課題。

著名人緊急アンケート あなたはポケモンを知っていますか？
『ポケモンの魔力』大月隆寛+ポケモン事件緊急取材班編
pp.105-106 毎日新聞社 1998.3.30発行

アンケート質問内容
Q1.「ポケモン」(ポケットモンスター)を知っていますか？
Q2.ゲームの「ポケモン」をやったことがありますか？
Q3.テレビアニメの「ポケモン」を見たことはありますか？
Q4.「Q2、Q3のいずれかで、やっぱり見た/聞いたことがある」とお答えいただいた方のみ、好きなポケモンがあればそれは何か、教えてください。
Q5.昨年の暮れに起こった事件(テレビ東京のアニメ番組「ポケモン」を見ていた子どもたちが全国で倒れた事件)はご存知でしたか？
Q6.事件でもっとも問題になったシーン(ピカチュウが点滅し、発光する)はご覧になりましたか？
Q7.今回の事件についてどう思われますか？「感想などを自由に。」

橋爪大三郎 (社会学者)

①知っています。②ありません。③ありません。⑤知っています。⑥ニュースで見ました。また録画の再生を職場(大学)で皆と見ました。
⑦アニメとオリジナルのゲーム、またポケモンブームは別々のことなので、大騒ぎすることはない。ただし、TVの画像規制は早く取り組むべき。

1998年(平成10年) 12月18日(金曜日)

週刊読書人

株式会社 読書人 発行

40人へのアンケート

一九九八年の収穫

年末恒例のアンケート

特集「一九九八年の収穫」

(1~3面)をお送りし

ます。本年からは、人数を大幅に増加し、より深く、様々な分野の専門家、研究者、読書家の方々40名にお願いした。アンケートは、この一年間に出版された書籍の中から、ジャンルを問わず今年の収穫と思われる本、印象に残った本、是非にも薦めたい、お押しの本を三冊挙げていただき、それぞれコメント、推薦理由を添えていただきます。年末年始の読書ガイドとしてご利用ください。掲載は五十音順です。

(編集部)

橋爪 大三郎

今年もとても印象深かったのは、大澤真幸『戦後の思想空間』(筑摩書房)。小冊ながら、スケールの大きな構想と、細部のアイデアの緻密さに感心する。戦後の定型化した言論の配置を相対化し、なおかつ、一切を相対化し、とするポストモダン主義にも厳しく一線を画す、絶妙な位置を著者は占めようとする。

町田康『夫婦茶碗』(新潮社)と花村萬月『ゲルマニウムの夜』(文藝春秋)は、規範の崩壊と暴力の果ての再生を予感させる小説だ。それほど凝った仕掛けがあるわけではない。が、暴力とは、現実

から剝離し衰退しつつある言葉に対する、信頼の回復の問題であることがしつかり際みえられている。町田の場合、ふくれあがる醜舌で自己が、言葉への依存と言葉の空しさを象徴している。花村の場合は、汚辱にまみれほとんどの年暮りに値しない空間で最後を賭みとて手の廻りところが、温存する言葉があることが暗示されている。(はこひめ・だんざつ)氏(東京工業大学教授・社会学専攻)

●質問事項

【質問】
Q1 ●簡単なプロフィールと、本とのかかりをお教えてください。
お名前・住所・電話・ファックス・メール・URLなどを差し支えない範囲で記入ください。また、掲載してもよい連絡方法やURLがありましたらお教えてください。
Q2-1 ●本の再販制度は、これまであって良かったでしょうか、不要だったでしょうか。
Q2-2 ●その理由をお教えてください。
Q3-1 ●今後も引き続き本の再販制度は必要とお考えですか、不要とお考えですか。
Q3-2 ●その理由をお教えてください。
Q4-1 ●本の再販制度は、図書館運営にどのような影響を及ぼしていると思われるか。
Q4-2 ●その理由をお教えてください。
Q5-1 ●図書館界に対する要望などがありましたらお書きください。図書館界の方は、出版界・出版流通界に対する要望をお書きください。

【発信者名】
ず・ぼん編集委員会
1998年04月01日発

橋爪大三郎

社会学者、東京工業大学教授。

一九四八年生れ。

連絡先 ●東京工業大学

TEL03-5734-2667

hashizm@valdes.titech.ac.jp

http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm/

ac.jp/~hashizm/

本との関わり ●仕事柄、本は読む。

Q2-1 必要だったか ●要らなかったのではないか。

Q2-2 理由 ●書籍の企画、販売の可能性をせばめた。

Q3-1 今後も必要か ●どうしても必要とは思わない。

Q3-2 理由 ●書店が価格設定できるように。

Q4-1 図書館への影響 ●図書購入費が安くなる。

Q4-2 理由 ●図書館が予約を一定数まとめ、安く買いとれるようにすれば、販売も安定するのでは。

Q5-1 要望 ●従来型印刷、出版に

対応しない電子出版に対応できる態勢をととのえてほしい。

シリーズ 国際化を目指して

確かな架け橋・中国研修旅行



橋爪 大三元

東工大の学生と共に中国を旅行する授業「中国研修旅行」も、98年の夏で4年目である。

旧人文系の一般教育科目が「文系基礎科目」「総合科目」に改組されたのが数年前。その総合科目Bのひとつが、私の担当する「中国研修旅行」である。

1988年に初めて中国を訪れた私の印象は、日本の隣りに、こんなに何から何まで正反対の国がある。しかし日本人は、何とその実態を知らないことか、という驚きだった。それ以来、何回も中国を訪れ、さまざまな発見を重ねるうちに、この体験を独り占めするのはもったいない、なんとか学生諸君と共有する方法はないものか、という思いにかられた。そして準備のすえ、ようやく開講したのが「中国研修旅行」である。

とにかく前例のない授業なので、心配し始めるときりがない。しかし幸い、共同研究でお世話になっている天津社会科学院、特にその日本研究所の皆さんが万全の受け入れ態勢を整えてくださったおかげで、毎回、割安で安全な旅行ができています。

夏休みを利用して中国各地に

初回の95年は、40人が北京→天津→重慶→三峡ダム→武漢→深圳→香港と、沿海と内陸地域を見学した。96年は35人が、北京→ハルビン→長春（新京）→瀋陽（奉天）→大連と、旧満洲地区を見て回った。97年は65人が、北京→西安→玉門関→敦煌→吐魯番→ウルムチと、シルクロードの跡をたどった。今年には55人が、北京→昆明→大理→桂林→上海と、雲南省の少数民族地域に足を伸ばした。こうして学部3年を中心のべ200人の東工大生が、中国各地を訪れたことになる。

引率していて楽しいのは、数日のうちに学生たちがみるみる変化してゆくことである。大学では見せない生き生きとした表情。見るもの聞くもの、すべてが新鮮な刺激となつて、彼らに吸収されてゆく。言語や食生活をはじめとする文化の違い。社会主義という体制の違い。日本を遠い異国と考える、多く

の人びととの出会い。ある学生は、生まれてからこんなにたくさんのかたを話し合ったのは初めてだと言ひ、別の学生はこのまま中国にいたいと言ひ。多くの友人ができ、日本に帰国してからも一緒に旅行したり、交流が続いているようである。教室に坐っているだけの授業では得られない、人間同士の触れあひ、異文化との出会いがある。

地球社会の一員として

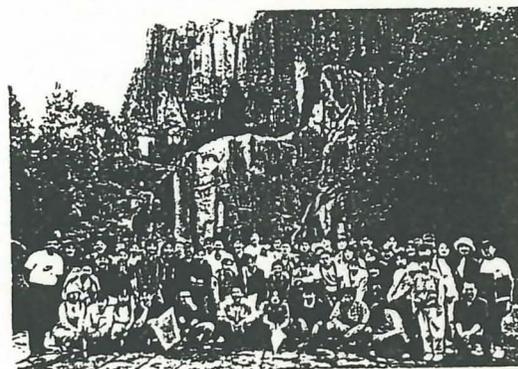
忘れがたい印象も、数多く残っている。三峡を下る船中の四日間、壮大な自然と巨大ダムに沈むはずの村々。ハルビン郊外の731部隊跡や平頂山虐殺記念館では、目を覆いたくなる旧日本軍の残虐行為のかずかず。摂氏50度に迫るゴビ砂漠の火炎山や、見渡す限りさまざまな民族の屋台が賑わうウルムチの夜市。夜行列車から見上げた、宝石をまき散らしたかのような満天の星空。雲南高原の真ん中で、チベット族、イ族、白族、タイ族のレストランが並ぶ大理の古城。香港にも負けない、上海浦東開発区に林立する高層ビルの多さと、スケールの大きさ。古い中国と新しい中国が混在する変動の息吹に、自分も地球社会の一員なのだという実感が、改めてこみあげてくる。

専門の学者の講義が聴けるのも、ありがたい。去年は敦煌美術の専門家が駆けつけてくれた。今年は雲南大学で、元新聞記者、現地に住み込んでタイ族の調査をした羅助教授の講義に耳を傾けた。

成果のあつた短期留学

今年には、オプションで、天津に二週間滞在する短期留学を日程に加えてみた。中国語、文化・社会経済の講義、太極拳、書道、現地大学生との交流ほかと盛り沢山な内容で、収穫が大きかった。学生諸君のレポートは、ホームページで見ることができる。

<http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm>
こういう授業が必要だと、ますます痛感している。



(大学院社会理工学研究科価値システム専攻 教授)

社会のリアリーティを丸ごと背負え

橋爪大三郎

社会学は隙間産業です

私の専門の社会学というのは、簡単に言うと、テキサスヒット狙いの隙間産業なんです。ですから、政治学や経済学がちゃんとしている間は出番は少ないんですけど、ところが今は、経済制度も法律や行政制度もうまくいかない。そこで、機構改革や構造改革をしようという話になっています。

お鉢が回ってきた、と考えられます。ですから、この状況は、社会学の実力に依っているわけではない。社会学というのは個人芸で、確立された枠組みはないのです。「皆さん、こういう角度から考えましょう」と言っても、生産性が上がらない。そこで、「探索行動型」になる。

アリと社会学

たとえばアリは、エサがあると、一直線にそこまで進んでいって、たかっつて、すぐに帰って帰りますよね。エサがないときにはどうするかと言うと、みんな同じ方向に行くのではなく、バラバラにうろつく。そこで、たまたまだれかがエサを見つけたら、みんなに信号を送る。ここまでは「探索行動型」ですが、その後は「一斉行動型」になる。

社会学は学問の歴史が浅いし、制度化の度合いも緩いから、「探索行動型」、すなわち「個人芸」になる。そこで、個人芸で見つけてきたおもしろい話なりテーマなりが消費されていく。「制度型」の学問では、個人の才能や芸は目立ちません。

新しい規範を確立しよう

私は現在の世の中の「匿名（無秩序）」な状況に対して、「新たな規範の確立」の必要性を説いていますが、これは社会学の応用問題です。

たとえば宮台真司さんは「規範や倫理はクソクラエ」です。宮台さんの言い方は、一種の逆説、アイロニーなんです。現状に対する異議申し立ての言説ですから、政治的だし、駆け引きがあります。駆け引きをすくずくおそれている相手に引きずられるおそれがある。駆け引きなしの発言をすることも大切だと思います。

そうすると、時代やさまざまな事柄に動かされない、普遍的な人間関係の基礎はなにか、ということが重要になってきますが、私はそれは言語だと思っんです。人間にとって一番幸せなことは、自分にとって望ましい人間関係や社会を作り上げる能力、すなわち、言語を十分に使いこなす能力に恵まれていることだと思います。そういう能力を高めていくことが、一番重要じゃないのか。

「規範」というのは、自分と言語との折り合いがよい、ということだと思います。「規範」とは、こういうことをすべきだとか、自分のことをうまく説明できるとか、自分の希望、正しさ、そういうことをきちんと言葉で的確に伝えていく能力がある状態である、とも言える。こういうことを言う「合理主義者だ」と批判されていますが、言語の機能を認めない状況とどうやって格闘していけばいいのか、そこが問題と



橋爪大三郎 (はしずめだいざぶろう)
1948年神奈川県生まれ。開成高校出身。東京大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士課程修了。「言語派社会学」の樹立を目指して軌程を駆け、言語、権力を三つの説明原理とする「記号空間論」の構想を展開。現在、東京工業大学教授。著書に「圏域としての社会科学」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「橋爪大三郎の社会学講義」など

なる。
言語以外の現象というのは必ずあつて、そこは混沌としていて割り切れないし、ぐしゃぐしゃな状態なんです。その状態に言語という道具でもって、何とか秩序を与

えようとすると、そのダイナミズムのなかで、人間は考えていくし、生きていくし、社会も作っていく。そこで、言語のあるべき位置というものを、常に再発見していくということが、時代時代のやり方で

はないかと思えます。

社会のリアリーティを丸ごと背負え

言語は、現在なら教育とかマス

メディアなどによって、複製され流布されて、いつも外から自分のところに届くようになっていて、自分の内側から湧き出てくる言葉がないという状況が「無規範」ということだと思います。

「外から与えられる言葉はまっぴらだ」という言い方はよくわかります。でも、それだけ言っていたのでは、内から言葉が湧き上がってくる「か」と言う、そんなに簡単ではない。でも、少なくとも目指すべき方向ということでは、外から与えられる言葉をただ拒否してはいけません。という段階ではないと思えます。

たとえば、たびたび登場していただいている宮台さんの言われるように、「茶髪でルーズソックスの女子高生が社会のリアリーティを支えている」という面は否定できません。そこをよく理解しているのは結構だけれども、もう一方で、蔑まれていたただのオジサン・オバサン連中もまた、社会のリアリーティを背負っている。彼（女）らのこともよく理解して、その両方を背負わなければまずいのではないかと、思います。片方がダメで、片方が時代に適合している、ということは必ずしも言えないだろう、というのが私の直感です。

(取材・構成 矢内裕幸 写真 安井仁)

1998.4.1発行

注目の座談会再録

本誌昭和四十二年四月号
「特集・新しい職業倫理」の中の「社会人一年生座談会」

東大で教わらなかつたこと

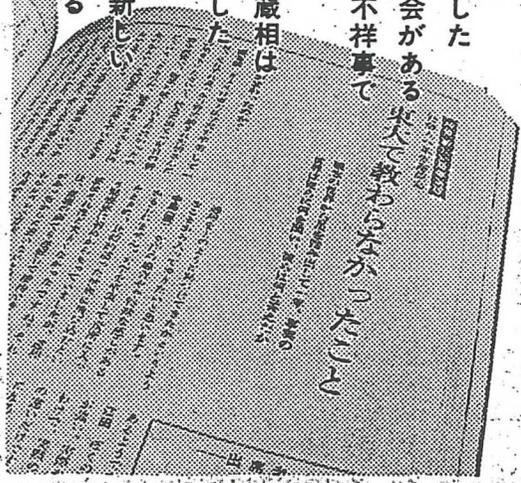
出席者
(いずれも当時)

なかじまよしお
中島義雄
(大蔵省主計局)

えださつき
江田五月
(司法研修所)

(仮名)A
(仮名)B
(大手都市銀行) (大手自動車メーカー)

昭和四十二年、本誌は四月号で「新しい職業倫理」を特集した。その中に、前年東大法学部を卒業した社会人一年生の座談会がある。出席者のひとり、三年前のいわゆる二信組問題にからむ不祥事で辞職した元・大蔵省主計局次長の中島義雄氏だった。今年二月、折からの大蔵批判のなかで登場した松永光・新蔵相は着任早々、中島氏の脱税疑惑についての「再調査」を口にしたところが三日後の閣議で、「一転して」「再調査せず」と首相に報告したことを記者会見で明らかにしたのは記憶に新しい。いずれにせよ、この座談会から三十一年の歳月が流れている。「新しい職業倫理」がまた問われる時代がやってきている。



中島義雄氏(当時)



江田五月氏(当時)

解説

江田五月氏をはじめ東大法学部の卒業生四人が『中央公論』誌上で対談した昭和四十二年の四月、私は安田講堂で入学式に臨んでいた。翌年には「東大闘争」が始まり、全共闘が結成されるなど、時代は大きくうねっていた。その直前の、古きよき(?)東大の雰囲気、私もかろうじてかすったことになる。この座談会を読んで、「東大」がそのころの学生や世間にどれほど威圧的な権威と感ぜられていたかを思い出した。

「社会人一年生」四人は、学生気質が抜けきらず、どこか生硬なところをまだ残している。一人ひとりの発言の内容はともかく、めいめいが当然としている無意識の前提が、今日から見てむしろ興味ぶかく思われる。

編集部は、大学と実社会とのあいだに大きな落差があると考え、それを検証しようとするのに対し、四人がそれを否定する。喰い違いがあるようだが、その否定の仕方は、「一

年目ではまだわからぬ」「私の職場では違うが少な」といったもので、編集部の前提を実は承認している。

四人に共通しているのは、出身大学への帰属意識が強烈なこと。そして、大学での思考枠組みに忠実であることである。彼らはそれを「概念的」「抽象的」と形容する。実社会の現実と噛み合わない、あるいは、実社会の現実と無関係だが、しかし、人間の考え方や社会のあり方について、あるべき指針を与える。そういう共通の枠組みを、大学が彼らに与える。そして、その枠組みを共有することが、大学の出身者(エリート)として実社会に参加する資格になっている、と彼らは認識している。

大学での思考の枠組みとは、たとえばマルクス主義だった。マルクス主義はエリート主義的で、前衛、知識人といった発想をもつ。卒業ののち、マルクス主義の内実は抜け落ちても、前衛や知識人といった彼らの役割規定は持続していく。大学教育は、一種のイデオロギー教育だったのである。

思えば全共闘は、このシステムを破壊したのだ。

情報化が進み、社会主義圏の実態が明らかになった。革マルも中核も、反スターリン主義を掲げた。大学の思考枠組みも、その理想主義的な権威のよりどころを失い、実社会に對して無力な存在であることが明らかになっていった。大学教員もただのサラリーマンであると誰もが思い始め、大学が実社会の情報に依存するようになった。

とすれば、かつてのように、大学の卒業生が思想的・道徳的優位によって実社会をリードする、という構図は成り立たなくなる。最後の歯止めがはずれたかたちになり、官庁の腐敗・汚職がとめどなく進行する土壌となつたのではないか。

大学が実社会で有効な教育を行なうこと。そして実社会(組織)が、有効に機能する行為規程を生み出すこと。この課題に、日本社会はまだ応えていないのである。

(橋爪大三郎・東京工業大学教授)